第61回舞踊学会大会・シンポジウム報告

「クロスオーバーする身体が拓く新たな地平」

第１日目：12月５日（土）14：00～17：00
会　　場：筑波大学・大学会館ホール

演者　石井 達朗（慶応義塾大学名誉教授）
　　逢坂 卓郎（筑波大学大学院教授・芸術）
　　平山 素子（筑波大学大学院准教授）
　　片岡 康子（早稲田大学大学院客員教授・お茶の水女子大学名誉教授）
司会　村田 芳子（筑波大学大学院教授）

≪テーマ設定の趣旨≫

世界的なグローバル化・情報化が加速し，その破綻の予兆さえ見せ始めた現在,改めて生身の「身体」への可能性が注目されている。こうした状況にあって，舞踊は,「身体」を共通項として，関連する芸術，体育・スポーツ，医療や福祉などの様々なジャンルとの新たな交流・融合が広がっている。例えば，体育・スポーツで新たに展開されている身体論では,「偶発的即興的な身体運動をめぐる気付きと交流」,「研ぎ澄まされた身体の内面的な感覚」と「確実に他者とつながり連携している」という舞踊と連動する側面が語られている。

本シンポジウムでは，このような《ダンス・身体・クロスオーバー》の３つをキーワードに，芸術と体育・スポーツ，文化と教育，理論と実践，また，それ以外の異なったジャンルやジェンダーの問題等をも含めて，多様な領域が交錯する地平から,「身体」が拓く新たな可能性を探求するという趣旨から本テーマを設定した。また，今回会場となった筑波大学における舞踊は,体育･スポーツの中に所属し，芸術専門学群と隣接し，まさにそれらが交差するところにあり，こうした特徴を生かし，２日目のダンスパフォーマンスの実践と関連させた議論ができるのではないかと考えた。

≪各シンポジストの発表趣旨≫

以上の趣旨のもとに，様々な立場から「身体のあり方」を見つめ，向き合い，研究と実践を重ねてこられた４名の先生方に演者をお願いした。特に，ゲスト講師として，日本のライトアートの草分け的な存在として数々の舞踊とのコラボレーションの試みをされてきた逢坂卓郎先生に加わっていただいた。以下発表順に概要を紹介する。

１.「サーカスー異種・異物陳列のスペクタクルを巡ってー」　石井 達朗氏

シャーマニズム的な舞踊から現代の舞踊に至るまで，そこで展開される生身の身体について長年研究をされている石井氏には，サーカスという視点からお話しいただいた。曲芸や動物芸と呼ぶものは，遠く紀元前からあったが，近代サーカスの誕生は，1770年頃，イギリスのフィリップ・アストレイが円形のリングで曲馬を見せたことに始まり，約100年後，アメリカのP・T・バーナムは,それまでの畸形見世物に,移動動物園･曲馬ショーなどを加えて大サーカス団をつくる。サーカスは当初より異種・異物陳列のスペクタクルとして出発し，それが20世紀にどのような道をたどったのか，クロスオーバーの意味を考える上で興味深いお話であった。

左より，
石井氏，逢坂氏

左より，
平山氏，片岡氏

２.「越境するパフォーミングアーツと身体」　逢坂 卓郎氏

本学芸術専門学群の教授として日頃から舞踊と関わりの深い逢坂氏には,本学における「パフォーマンス演習」の実践を中心に芸術と舞踊との境界にある身体についてお話しいただいた。特に，出来事，場所，テーマを重視する芸術における身体表現と，動きと身体自身の美を追求してきた舞踊との境界で，発表を続けてきた先生の作品映像を通して，動きを伴う表現の新たな可能性を視覚を通して感ずることができた。また，30年以上の歴史を持つ本学芸術の「パフォーマンス演習」の中から，学生達の実験的な作品による多様な提案が紹介され，すでに学生間で越境し合うパフォーミングアーツと身体について実践の可能性が提示された。なお，この実践は2日目のパフォーマンスでも上演された。

３.「ダンサーが自らの身体に課すこと」　平山 素子氏

ダンサーとして振付家として常に変容し進化しながら，日本のダンスシーンをリードする存在として活躍する平山氏には，ダンサーの立場から踊る身体，表現する身体のリアリティーについて語っていただいた。あらゆる表現に直ちに反応で

きる能力を備えていることを要求されるダンサーたちは，身体にある種の抑制をかけ，日々研ぎ澄ます。その先にある自由な表現の域にどのように到達するのか。この「自由と規制」という身体が抱える永遠の命題について，まさに日頃の踊る身体から発せられる氏の話はリアリティーに富んだ興味深いものであった。なお，平山氏には，２日目のスペシャルパフォーマンスとして，逢坂氏のライトアートによる作品を披露していただいた。

４．「ダンス文化と教育をつなぐ―ジェンダーを乗り越え，“今”を切り拓くダンス教育」

片岡 康子氏

３度にわたる学習指導要領の作成委員を歴任され，舞踊文化と教育をつなぐ中心的役割を担ってこられた片岡氏には，舞踊教育の立場からこれまでの動向とこれからの課題と可能性について提言いただいた。長年,「学校ダンス校門を出ず」,「女・子どものダンス」などと風評されてきたダンス教育は，平成元年以降，１．ダンス文化と教育をつなぐ，２．ジェンダーを乗り越える，という二つの視点から見直しが行われ，平成10年度の改訂では初めて「リズム系ダンス」が主内容に加わり，平成20年度の改訂では中学校１-２年まで男女必修となった。これまでの舞踊教育の変遷における大きな転換点をわかりやすく資料でまとめていただきながら，これからの可能性を的確に提示していただき，学会員に舞踊教育への理解を深める貴重な機会となった。

≪質疑応答の概要≫

４氏の発表の後，演者同士のやり取り，フロアとのやり取りなど活発な議論が展開された。特に演者同士のやり取りは，それ自体が多様な視点や立場がクロスオーバーするものであり，そこで新たに生まれる出会いや共感が興味深かった。

以下，そのやり取りの一部をまとめた。

●演者同士のやり取り

（石井） 逢坂先生の話に対して。エレクトロニクスと身体を組み合わせた最近の作品は，身体の延長線上にあるような傾向が強くなっている。そういった意味で，エレクトロニクスの最先端のアートは，Interactiveなアートと言える。

平山先生の話に対して。ガガは，初めてダンスする人でもプロのダンサーでも同じ空間の中でワークショップに参加できるということで，おのずと空間をシェアしているような感じがあった。卓越したプロフェッショナリズムとそうでないものとの境目を，どんなふうになくしていくかでまた違った形の活動が可能なのではないか。

（逢坂） 平山先生の話に対して。無重力空間（宇宙空間）のプロジェクトに参加して，宇宙空間における芸術とはどのような意義があるのか，それは，今居る所から外に出て行為することによって今の空間を理解すること。それと同じことが，芸術の意義としてあるのではないか。

（平山） 逢坂先生の話に対して。今まで自分が得た感覚を取り外すことは次に向かうためにとても大事なプロセス。無重力での体験はひとつのチャレンジであった。クロスオーバーとは，舞台空間でしか踊れないとかというのではなく，一度外すことで戻って来られる要素があるのかなと思う。

（片岡） 以前，勅使河原さんのワークショップで，一時間両足で上下に跳ぶというのがあった。ダンス経験のある人もない人もだんだん繰り返すうちに力が抜け，ソフトな両足跳びができるようになって，一人ひとりの内面的なエネルギーが外へ拡がっていった。つまり自分の体への気づきが起こり，さらに他者との交流関係で気づきが起こっていって，感銘を受けた。これから学校では中２まで必修となって，ダンスを好きな子も嫌いな子もダンスを学習することになる。それには身体を通してダンスの面白さを体験してもらわなければ普遍的な展開ができない。ダンスが持っている魅力とは身体の内側にあるもので，それを引き出す教師の指導力がさらに必要。身体の問題はダンスの本質で，そこなくしてはダンスの面白さには到達できないだろう。

●質疑・応答

Q クロスオーバーということで，日本人として日本の伝統芸能にも目を向けるべきなのでは?

A 伝統と創造はクロスオーバーの重要な視点。

（平山） 自分が踊っているときの感覚を話すと，宮本武蔵や世阿弥と同じことを言っているらしいことがある。それは先人とリンクする，嬉しい感覚。

Q アメリカで育った私は，学校でダンスを学んだことはなく，日本の方が進んでいるのではないかと思う。アメリカの事例と，日本はどのように舞踊教育を発展させていきたいのかを聞きたい。

A （片岡） 世界のどこを見ても，体育の中でダンスの学習内容がこんなに豊かに実践されているのは日本しかない。気が付いたら，ダンスを擁した日本の体育がとても豊かなものになっていた。

以上，多様な視点からの様々なやり取りを通して，舞踊における身体の在り方とは何なのか，異なった様々なジャンルや立場とのクロスオーバーとはどういう意味をもつのか，そしてどこに着地しようとするのか，を焦点に有意義な議論となった。また，フロアの松本千代栄先生より戦後の舞踊教育における改革当時の貴重なお話をいただくことができた。

（文責　村田芳子）

≪ゲスト講師プロフィール≫

逢坂卓郎：日本のライトアートの草分け的存在。80年代にJoyce theaterなどで舞台美術と照明の仕事をする。同時に光，生命，宇宙をテーマとしたライトアートの作品を世界各国で発表。2008～9年に国際宇宙ステーションで芸術実験を実施。ロレアル大賞98，NDF98ディスプレイ産業大賞，06北米照明学会賞地域賞など，受賞歴多数。